
あの空の向こう側

白虹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空の向こう側

【Nコード】

N1662B

【作者名】

白虹

【あらすじ】

生きるとは何か。目的を達することか？それとも・・・エレベーター事故で出合った二人の人間。一人は過去を失い、全てを無くそうと考える男性。一人は未来を失い、過去を作ろうと考える女性。これは、全てを補うための話。

第一話 メンバーズセット 前編

九月二五日。天候、晴れ。

これが最後の日記になるだろう。

もう、此処まで来ると何も書くことはない。

明日、成功させよう。何が何でも。自分が世の中から消えようとも。十時四十二分就寝。

早朝朝七時半。俺は、何も考えずエレベーターに乗った。
先客は五人いる。

茶髪のショートカットの姉さん、制服を身にまとった女子生徒が二人、髪金の厳つい兄さん、中年のサラリーマンの五人だ。

エレベーターに乗り、ドアが閉まる。俺はそのドアにもたれる。

エレベーターが三階を過ぎたところで何故か停止した。

一同は啞然とした。無論、俺も。

「あれ、止まってるよね？」

ショートカットの姉さんが独り言を云った。

「ねえ」

またも独り言・・・かと思われた

「ねえって、ちよっと、聞いているの？」

ショートカットの姉さんが俺に向かって軽く怒鳴った。

「俺・・・です」

「あんたに決まってるでしょ！」

云い終わる前に打ち消されてしまった。「何ですか？」

「あんた、何で止まっただか判るの？」

判るわけない。実際俺も良く判ってないのだから。

その旨を伝えようと思ったとき、女子の一人が弱い声を上げた
「加奈子ちゃん・・・大丈夫だよ」

「大丈夫よ。事故だと思っけど、すぐ治るわよ」

成程。俺はこの二人の立場をすぐ理解した。

この、加奈子と呼ばれる女子は姉的立場なのか。

「ちよつと、どうなのよ！」

ショートの姉さんに怒鳴られた。

「俺が判る訳ないじゃないですか。実際、俺も状況が判らないんですから」

「なんだ」とガツカリされた。俺はどんな風に見えたんだ？

「ちよつと、事故ですか？こっちは急いでるんですけど・・・」

中年サラリーマンが不満をもらした。恐らく、この時間帯なら急いでいるし、こんな狭い空間から早々に立ち去りたい。

「ちよつと、その金髪！あんた、ドア開けられないの！」

髪金兄さんにそんなことを云うショート姉さん。何を無茶な。

「俺は無理だ」

「何だよ！」

髪金兄さんは無言で手を見せた。そこには包帯でぐるぐるにされた手があった。

「何よ、これ」ちよつと驚いて。

「仕事でちよつとあつてな。兎に角、コイツじゃ開けることはおろか、触ることもできねえ」

そう云った瞬間。兄さんはこっちを向いた。

「あと、出来そうな奴はその髭くらいだな。中年デブには無理難題だろ」

髭とは恐らく俺のことだ。それにしても中年デブは面白い。俺もそう呼ばせてもらおう。

「ってことで開ける、髭」

全員が俺を見ている。やれやれ、そんな馬鹿らしいことをしなきゃ

いけないのか。

ドアの隙間に指を入れる。だが、当然の如く指全体が入るわけもない。ドアの間に触れている状態で左右に力を加えた。

するとどうだろうか、ドアが開……くわけもなく、むしろ、俺の指が痛くなってしまった。

「まあ、当然だろうな」髪金兄さんがケラケラ笑う。何やってんだ俺。

ふと、あることを思いついた。

エレベーターには大抵こういうときの為に、非常電話というものが装備されているはずである。そう云おうと思ったとき、中年デブが私の思ったことをそのまま云ってくれた。

「そうか！」ショート姉さんが叫んだ。

案の定、エレベータースイッチの下に非常電話が装備されていた。

しかし、それを使うにはボルトでガチガチに止めてある蓋をどうにかする必要があった。

ショート姉さんは明らかに落胆している。

「あの、プラスドライバーならありますけど」

俺はそれを姉さんの前に差し出した。

「何で持つてるの？」

「こういうキーホルダーが好きなんです」

沈黙。それを破ったのは姉さんの行動。

思ってた以上に簡単にボルトが取れ、赤い受話器が見えた。そして、話し始める。

「あの、エレベーターが止まってしまったんです。場所ですか？紅翌市仲之、112の」

結構手際が良い。正直驚いた。

「ねえ、おっさん」

女子に呼ばれた。おっさんって……まだ二十代前半なのに。へこむ。

「あたし達遅刻確定なの。どうせこんな事云っても先生は信じてく

れないだろうからおっさん、証人になつて頂戴」

面倒だが、女子供の云う事には逆らえない俺である。

「判りました」

「良かった」加奈子ともう一人の女子がほっとした。

「ああ、私も頼みますよ」

中年デブにも頼まれた。正直、二回も振り回されたくはない。

「なら俺が行つてやるよ」と髪金兄さんが助け舟をだしてくれた。

兄さんナイス。

そんな会話をしていると、ショート姉さんが救援連絡を終了したのに気がついた。

「今から行くつて云つてたけど・・・三十分ほど掛かりそうだわね」
独り言のように云った。

「何ですか？」俺が訊く。

「このマンションは市の外れのほうに属するし、恐らく二階と三階の中間で止まったと思うからね」

そこまで判るのか？いや、後者は恐らく推測だろう。実際最後に三階を通り過ぎてから一分足らずで止まったから。

暫しの沈黙が続いた。それを破つたのはやはりショート姉さん。

「ねえ、折角だから自己紹介大会と洒落込まない？実質、待つてる時間暇でしょ？」

俺としては面倒且つ云いたくないのだが、皆は他にやることもないし良いかと云う雰囲気で、俺一人の独断で決められない状況だった。

「私は篠原祐子。大学生をやつてるわ」

ショートの姉さんがそう云った。続けて髪金兄さん、女子が喋る。

「柳輝樹だ」

「斎藤加奈子よ。隣の娘は山元愛美」

あと云つてないのは俺と中年デブだ。さて、どっちが先か・・・。

「おい、デブ、名前だよ、なまえ」

輝樹が中年デブを急かした。

「え、あ、えと・・・金堂大介・・・です」

とうとう云ってないのは俺だけとなった。しょうがない。

「皆月伍郎です」

「仕事は？」

ショート姉さんもとい、祐子さんが問い詰めてきた。何故俺だけ？
「えっと・・・」云い掛けたそのとき、急にエレベーターが動き出した。

皆、驚きと歓喜の声を上げた。エレベーターは二階で止まり、扉が開く。其処には、黄色一色のヘルメットをつけた人が二名いた。

「大丈夫でしたか！」

そう云いながら俺等を見回し、怪我人と思われる人が居ないことを確認すると

「今すぐ現場確認をするので誰か一人状況説明をしてくれませんか？」

俺と輝樹は一応仕事がある。加奈子と愛美、中年デブもとい大介にも仕事や学業がある。だとしたら・・・

「あたし、やりますよ」祐子が名乗り出た。まあそうなるわな。普通。

そんなわけで、俺は二人の女子学生に連れられ、学校へ行く羽目になった。

其処が、母校だと知るのは今から一時間後の話になる。

お前は空の向こうがどうなっているか知ってるか？

一度は父と呼んだ男から云われた言葉だ。

俺はその返答をしない。いや、出来ない。

しかし、今、何故そのことを思い出すのだろう。

気がついた頃には目の前に見覚えのある校門が見えていた。

「此処が、キミ等の学校？」

「そう、私立霞ヶ原学院。この辺りじゃ有名じゃない？」

この辺りではなく、日本国民全員が知っているだろう。何故なら、此処は日本一の偏差値、日本一の土地、日本一の教師集団を持っているからだ。噂に聞くと、合格率ほぼ0らしい。何だそれは。

「行きましょ。時間は一分たりともまってくれないわ」

加奈子がそう云うと、愛美が無言で後ろを着いていく。俺も其れに従う。

応接室だか、どっかの豪華な家の一室だか判らない所で俺は質問攻めにされ、くたくたになった体で校門を出た。

「やれやれ、手厳しさは変わってないみたいだな」

一人ごちに云った。周囲には誰も居ない。当然か。此処に来る人間は生徒か教職員か事務員くらいだろう。

校門の目の前のバス停で待っていると不意に後ろから声を掛けられた。

「元氣そうだな。皆月」

振り向いた。其処にはかつての担任がいた。

「・・・何のようですか？ 邑上教諭」

邑上清輝。俺の担任だった。皮肉しか云わない気に入らない奴。

「御前が何で此処にいる？ 此処には御前の居場所なんか無いぞ」

判っている。俺だって好きで来たわけじゃない。その旨を云おうとしたとき、バスが来た。俺は無言で乗る。ドアが閉まる直前。

「私は御前なんぞ認めない。此処の卒業生だって事もな」

そう云われた。ふん、下らない。今更そのことか。過ぎ去った過去は消せない。そんな事も判らないのか。そうバスの中で思った。口には出せない。いや、出すまでも無い。

そんなことを思いながらバスは走り去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1662b/>

あの空の向こう側

2010年11月14日09時45分発行